

子どもは自力で乗り越えるもの



田中三保子

新年度が始まり、三才児20名の受け持ちとなりました。

今度の組には、母親と離れるのをいやがって泣く子がたくさんいました。シクシク、メソメソといった泣き方でなく、驚くほど大きな声でワァーと泣きます。抱きとってなだめてあげようとする私の手を振り払い、「ママがいい」、「ママのところに行きたい」と泣き続けるのです。

Rくんはそんな子どもの一人でした。母親から引き離されることへの不安が余程強いのでしょ、母親がすぐ

そばにいてくれないと大声で泣きます。(間もなく下の子が生まれることが影響していたのかもしれませんが)少し離れたところで見守っているのではとても安心できない様子でした。当然のことながら、私は母親から自分を引き離す存在として映っていたようです。私がそばに寄っていくと母親にしがみつき、私を叩いて拒否しました。しかたがないので、母親と一緒にいてもらって様子をみることにしました。

登園すると決まって大声をあげて泣きますが、母親のそばににいるうちに落ちついてきて、まわりの子どもたち

の遊ぶのをながめていたようになりました。そして、日が経つにつれて、母親にそばで見えてもらえば遊ぶようにもなってきました。けれども、帰る時になると、登園時と同じように泣き出してしまいます。玩具を片づけ、椅子を並べ出すと泣き始め、先まわりして玄関で待っている母親に手渡すまで、大声で泣き続けます。

いつになっても泣かなくなる気配がみられないので、母親は、園庭の外から見たり、玄関の椅子に座って待っていたりなど試みたようですが、その度にRくんが泣きながら母親を求めて出ていってしまうので、結局、またへやで一緒に過ごさざるを得ませんでした。

五月の初めになって、やっと泣かずに帰れるようになりました。そしてある朝、Rくんの後におばあさんの顔が見えて、私は思わずかけ寄りました。母親が一緒なので、ひどく泣かれるのではないかと心配になったのです。ところが、彼はにこにこことへやにはいつてきました。私と一緒に手洗いとうがいをするせるとブロックで遊び始め、心配顔のおばあさんには一度も視線を走らせ

ませんでした。

この日からRくんは泣かなくなりました。今までそれほど手こずらせてくれたのが嘘のようです。一体いつまで泣き続けるのだろうかと正直なところ憂うつになり始めていた私は、本当に安堵しました。毎朝のRくんと一緒に母親の顔もとても晴れやかになりました。

それから二週間ほどが経ちました。ある日、砂場で遊んでいたRくんが、「幼稚園にお泊まりするの」とボソッとつぶやいたのです。それほど幼稚園が気に入ってくれたのかしらと嬉しくなると同時に、ひよっとしたら帰りたくないとの意志表示かもしれないと心配にもなりました。案の定、帰りましょうとの呼びかけには知らん顔で、何度誘いかけても砂場から離れようとはしませんでした。やむなく抱きかかえて靴をはきかえさせようとするワツと泣き出し、とめられなくなってしまいました。泣きじゃくりながら帰っていくRくんの後姿を見送りながら、ひどく気が重くなっていくのを感じました。今まであれほど頑強に母親と離れることを拒み通してきた

た彼だから、幼稚園がよくになったら、今度は帰ることを拒否し続けるかもしれないという気がしたので。それだけでなく、もっと遊びたくて帰るのをいやがって逃げまわる子が、すでに一人いるのですから。

翌日はお誕生会でした。先月のときとはうってかわって、Rくんは機嫌よく劇などを見、おやつを食べ、砂場で遊び始めました。昨日のことがあったので、心配しながら帰りの声をかけたのですが、驚くほど素直にへやにはいつてきました。そして「アメ食べるの」と私に言いきました。なるほど、おやつが残りが食べたくてすんなり戻ってくれたと合点がいきました。戻ってくれたことは喜ばしいのですが、食べてもよいというわけにはいかないのです、「おうちに帰ってから食べましょうね」と断りました。その途端、昨日と同じように泣き出してしまいました。どうなだめてもひたすら泣き続けます。そして、玄関に行く途中、廊下に座りこんでしまいました。子どもたちがみんなさよならをした後、なおも泣き続けるRくんを抱きかかえて、やっとのことで母親に手

渡したのですが、すぐに戻ってきてまた座りこみます。呼び戻しにきた母親を拒み、「帰らない」の一点張りです。何とか帰らせようとする母親を叩き始め、「ママきらいだ」「ママ死ね」と泣きわめきます。その同じことをばも私も浴びせられたことがあります。あのときは、母親から自分を引き離そうとしている私が憎らしかったのでしょう。今は、こんな楽しい幼稚園から自分を連れ去ろうとする母親が疎ましく思えたにちがいありません。

このままではどうにもならないような気がして、とりあえず、母親にはRくんの見えないところで待っていてくれるように頼みました。まだ泣きじゃくるRくんを前に、どうしたものかと思案しました。ひとりぼっちにしたら、心細くなって母親が恋しくなるかもしれないと考えて、言ってみました。「お友だちみんな帰っちゃったでしょう。先生ももうすぐ帰るから、幼稚園は誰もいなくなっちゃうの。」それでも頑固に「帰らない」を繰り返します。へやの灯りを消し、「先生も帰ります」とR

くんをひとり廊下に残して、職員室に姿を消してみました。どうするかしらとそっと見ていると、彼はへやにかけこんだままいつになっても出てくる気配がありません。心配になってへやにいつてみると、真中にRくんがつっ立っていました。もう泣いてはいないようです。大丈夫かなと思って帰るといふことを口にする、表情を固くして「帰らない」と言い張るので、しばらく様子を見るよりほかはありません。私がお皿を洗っている、Rくんが近寄ってきました。花台の向こう側に立って私をじっと見えています。しばらくすると花台の引き戸に興味をもったようです。「これ開くの?」「何がはいってるの?」「あつ、開いた。」「お薬があつた。」「引き戸をいじりながら話しかけてきました。お皿を拭きながら私も返事をします。やつと気持ちが落ちついてきたように見えました。近寄って思い切つて抱きあげました。今まで一度もおとなしく抱かせてくれなかったのに、ちょっと抵抗しただけで、でも泣きながら抱かれています。「ママが待っているから帰りましょうね。」と言いな

母親のところに連れていくと、母親の膝にワツと泣き伏してしまいました。母親に抱きとめてもらうと、安心してように顔をうずめてシクシクと泣いています。私もやつとほつとした気持ちになりました。

あれから一週間余が経ちました。Rくんは兄となり、二人のおばあちゃんに交代で連れられます。私の心配をよそに、彼はにこにこ登園し、友だちと淡いながらもかかわり、帰りましようときし出した私の手をにぎってくれるようになりました。あの日、Rくんは思い切り泣いて自分を押し通しました。そうすることで、自分のこだわりをひとつ振り切ってしまったように私には思えます。

子どもは、自身の内部にひそむ成長への障害を、自分の力で、時に鮮やかに乗り越えていくものだと、ことを、改めて感じさせられました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)